

令和7年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽咋工業高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
<p>1 【授業改善】 生徒が主体的に取り組むよう、個別最適な学習を推進することで、基礎的な知識・技能(技術)の定着に加え、思考力・判断力・表現力・コミュニケーション力を育成する。</p>	<p>① 主体的・対話的で深い学びの授業の実践に加え、個別最適な学習をさらに推進し、生徒の資質・能力の育成を図る。 教諭は年1回公開授業を行い、授業改善の実践を公開する。教員は年6回以上授業を参観する。 授業改善についての研究紀要を作成し、次年度に繋げる。</p>	<p>主体的で個別最適な学びの授業の実践により、各授業の生徒の8割以上が、各教科の特性に応じた資質・能力が向上していると回答する、教員の割合が A 90%以上 B 70%～90%未満 C 50%～70%未満 D 50%未満</p> <p>主体的で個別最適な学びの工夫により、より意欲的に授業に参加していると回答する、生徒の割合が A 90%以上 B 70%～90%未満 C 50%～70%未満 D 50%未満</p> <p>授業によって、思考力、判断力、表現力、およびコミュニケーション力が向上したと回答する、生徒の割合が A 90%以上 B 70%～90%未満 C 50%～70%未満 D 50%未満</p>	<p>教員対象に 12月にアンケート調査 100% 最終評価 A</p> <p>生徒対象に 12月にアンケート調査 96% 最終評価 A</p> <p>生徒対象に 12月にアンケート調査 97% 最終評価 A</p>	<p>「十分に向上させている」・「ある程度向上させている」を合わせた評価は100%となり、7月に実施したアンケートの94%を大きく上回り、全教職員が向上していると回答した。同時期に実施した生徒対象の授業評価アンケートでも、「学力・技術・技能等が確実に向上する授業である」に「あてはまる」と回答した生徒が99%にのぼり、教員・生徒相互に生徒の資質・能力の向上を実感している結果となった。 今後も引き続きChromebook等を効果的に使用して、学びが深まる授業を全教職員が実践していきたい。</p> <p>「よくあてはまる」・「ややあてはまる」を合わせた評価は96%となり、7月に実施したアンケートの97%を僅かに下回る結果となったが、判定基準の90%を大きく上回っている。同時期に実施した学習状況アンケートでも、「自身の理解度に合わせて学習内容や方法を適切にしたり、興味関心のある内容を調べたりすることで、学習内容が深まった」に「あてはまる」と回答した生徒が97%にのぼり、一斉授業のみではなく、個別の理解度に応じた学びの成果が現れている。 今後も生徒が自ら見つけた課題や興味関心に応じた指導ができるように、全教職員が生徒理解に努め、生徒が主体的に学ぶ授業を実践していきたい。</p> <p>「よくあてはまる」・「ややあてはまる」を合わせた評価は97%となり、7月に実施したアンケートの96%を上回る結果となった。同時期に実施した教員対象の学校評価アンケートでも、「生徒が思考力、判断力、表現力、およびコミュニケーション能力が向上できるような授業の実践を行っている」に「あてはまる」と回答した教員が97%にのぼり、学習方法による能力の向上を生徒が実感している結果となった。また、自分の思考を言語化し、相手に伝わる表現を考えることが、学習内容の理解をより深めることができ相乗効果となっている。 今後も思考、意見交換、発表等の時間を確保し、更なる向上につながる授業を全教職員が実践していきたい。</p>
<p>2 【進路実現】 キャリア教育を学校教育全般にわたって充実させ、生徒が将来の仕事について深く考えられる環境を整える。さらに、魅力的な課題研究を創出し、資格・検定・コンテストへの挑戦を通じて、生徒一人ひとりの進路の実現を図る。</p>	<p>① 企業との連携を強化し、生徒に有益な情報を提供して進路相談を充実させる。同時に、学校の教育活動全般を通じて生徒が主体的に進路について深く考える環境を整え、進路意識を向上させる。</p> <p>② ジュニアマイスター顕彰のゴールド特別表彰およびゴールド・シルバー・ブロンズの取得を目指し、学校全体で多くの資格・検定への挑戦意識を高め、企業や大学と積極的な連携など取組を改善し、認定者数を増加させる。</p>	<p>就職希望者の1回目(10月末)の就職試験における内定率が A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満</p> <p>ジュニアマイスター顕彰ゴールド、シルバー、ブロンズの認定者数が学校全体で A 60人以上 B 40～59人 C 20～39人 D 20人未満</p>	<p>10月末における内定率を検証 96% 最終評価 B</p> <p>年間(1月)の認定者数を検証 年間認定者数77人 最終評価 A</p>	<p>9月の就職試験において就職希望者74名中71名が1回で内定を獲得し、内定率は96%となった。生徒の意欲的な就職活動や自己分析の指導、企業との連携強化など、進路指導の改善が大きな成果を生んだ。一方で、不採用となった事例では、面接試験での人物評価は良好であったものの、専門的知識や基礎学力に課題があるとの企業からの情報提供を受けた。今後はこうした弱点を早期に補えるよう、学習面の指導を強化し、資格取得や基礎学力向上に向けた支援を計画的に進めたい。また、ホームページやメール配信を通じた情報提供を継続し、生徒・保護者の進路意識をさらに高め、全員の進路実現を目指す。</p> <p>1月末での年間認定者数は77人(前年49人)で、その内訳はゴールド特別表彰取得者が9人(前年2人)、ゴールド取得者が27人(前年12人)、シルバー取得者が32人(前年26人)、ブロンズ取得者が9人(前年9人)であった。 2年前に学校全体で資格取得の支援体制を改善した効果が、現3年生に顕著に現れている。今後も資格取得に挑戦しようとする機運が生徒の間で一層高まるよう、より組織的に資格取得を促す体制づくりに努めたい。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>		<p>○今の生徒は恵まれた環境で学習しているが、個別最適な学習を実現するための課題はどこか。 ○就職試験において、不採用が出たことの要因はどこにあるか。また今後どのようにその結果を生かしていくか。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策</p>		<p>○40人の生徒一人ひとりに対してバラバラな方法で学習させることは難しいが、どの方法がそれぞれの生徒に合っているか試行錯誤を重ねている。しかし「主体的で個別最適な学びの工夫によりより意欲的に授業に参加している」という問いに対し、4%の生徒が「当てはまらない」と感じており、その生徒への支援の在り方が課題である。 ○不採用となった要因については、企業の採用基準に対して、技能面や学力面でやや不足していたことが考えられる。不合格が判明した段階で速やかに面談やフォローを行い、気持ちの切り替えと対策を支援した結果、次の採用試験で内定を得ることができた。今後に向けては、企業ごとの採用傾向をより丁寧に分析し、生徒や保護者に適切な情報提供や助言を行うことが重要であり、現実的かつ前向きな指導を行っていく必要がある。</p>		

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)	
3	【人間育成】 部活動・生徒会活動の活性化、規範意識の向上といじめを許さない学校づくり、ボランティアや地域貢献を通じて、人間力を高める。	① 生徒会の運営について、生徒会執行部が生徒にアンケートを行い、全校生徒が主体的に計画や立案に参加することで、行事への参画意識を高める。	生徒会行事に参加し満足できたと回答する、生徒の割合が A 95%以上 B 85~95%未満 C 75~85%未満 D 75%未満	生徒対象に 12月にアンケート調査 99% 最終評価 A	「大変満足している」・「おおむね満足している」を合わせた評価は99%と、A判定基準の95%および7月に実施したアンケートの97%を上回った。初の試みのリーダー研修は2学期に入り生徒や教職員への浸透が見られるようになり、今後は取組を継続していく段階に入ったと考えられる。1年間を通して、試行錯誤を重ねながら業務に取り組んできたが、多くの先生方の協力と、何より執行部の熱意が生徒に伝わったことが、今回の高い評価につながったと考えられる。
		② 生徒が活発だと感じる部活動を行う。部活動がより活発になれば、生徒会行事や学校行事も一層活発になるとともに、学校がより魅力的になる。	所属している部活動が活発だと感じる、生徒の割合が A 90%以上 B 80~90%未満 C 70~80%未満 D 70%未満	部加入生徒対象に 12月にアンケート調査 93% 最終評価 A	「よくあてはまる」・「ややあてはまる」を合わせた評価は93%と、A判定基準の90%および7月に実施したアンケートの91%を上回った。生徒に部活動に対する意識向上のアプローチには限界がある中、この結果は各部活動顧問の継続的な努力によるものと考えられる。 学校における部活動を取り巻く環境や意識の急激な変化を踏まえ、長期的な視点で本校の部活動の在り方を検討するとともに、持続可能な部活動について考える機会を設け、今後の改善につなげていきたい。
		③ 校舎内だけでなく、地域でもしっかり挨拶をおこなうことで、他者をおもいやる意識を高め、コミュニケーション力の育成の足掛かりとする。	学校以外(地域や登下校時)でも積極的に元気のよい挨拶ができていると回答する、生徒の割合が A 95%以上 B 90~95%未満 C 80~90%未満 D 80%未満	生徒対象に 12月にアンケート調査 96% 最終評価 A	「十分できている」・「ある程度できている」を合わせた評価は96%と、A判定基準の95%を上回った。SH時や規範意識週間等で挨拶の重要性の指導を行ったことが高い数値につながったと考えられる。 来年度も引き続き、「朝の挨拶運動」や担任のSH時の指導、規範意識週間等の機会を通して挨拶の重要性を指導していきたい。また、生徒の挨拶に対する意識も向上するよう働きかけていきたい。
		④ 規則やマナーを守り、思いやりの心を育むため、生徒への声かけや観察を通じて生徒理解を深め、規範意識といじめ防止の意識を高める。	本校の教育活動や規範意識向上の取組により、規範意識やいじめ防止の意識が身につけていると回答した、生徒の割合が A 100% B 95~100%未満 C 90~95%未満 D 90%未満	生徒対象に 12月にアンケート調査 99.1% 最終評価 B	「十分に身に付いた」・「ある程度身に付いた」を合わせた評価は99.1%と、前年度同期99.7%と同様に高い結果となった。「規範意識週間」等の取組に加えて、「いじめに関しての学年集会」や「担任による個人面談等の指導」をこまめに行うことで、生徒の規範意識やいじめ防止の意識が高まったものと考えられる。 来年度も、引き続き取組を継続し、生徒の行動が変容するよう工夫していきたい。
4	【情報発信】 本校の諸活動や工業の魅力を、保護者・地域に効果的に発信する。特に中学生への情報発信を強化し、定員充足を図る。	① 保護者懇談会以外の学校行事に対して、メール配信や羽工便り、ホームページ等の既存の手段に加え、新たなアイデアや工夫を取り入れ、保護者の来校者数を増加させる。	学校公開や文化祭、マラソン大会、PTA活動のような行事等(保護者懇談会は除く)で来校したことのある、保護者の割合が A 70%以上 B 50~70%未満 C 30~50%未満 D 30%未満	保護者対象に 12月にアンケート調査 68% 最終評価 B	保護者懇談会以外で本校に1回以上来校した保護者の割合は68%であり、昨年同時期の58%から10ポイント増加した。学校公開等では、時間割の掲示物や動線の案内図を分かりやすく工夫したり、各先生が保護者に気軽に相談できる雰囲気をつくったりと、先生方一人一人が「自分に何ができるか」を意識し行動してくれた成果だと考えている。 今後は、実際に来校された保護者からの意見や改善点を学校運営に反映させ、継続的に改善できるようなサイクルをつくりたい。
		② 本校の活動を広く知ってもらうために、在学生やその保護者、中学生、地域の方に積極的に見てもらうようホームページを改善し、その閲覧数を増やす。	ホームページの閲覧回数が、月平均で、 A 45,000件以上(1日1500件) B 40,000件~45,000件未満 C 35,000件~40,000件未満 D 35,000件未満	閲覧回数 9月 約45,000件 10月 約46,000件 11月 約38,000件 12月 約73,000件 月平均 約50,000件 最終評価 A	2学期の閲覧回数は月平均約50,000件となり、A判定基準を上回った。12月は約73,000件と閲覧数が多く、修学旅行の近況報告が毎日更新したことが要因であると考えられる。年間を通して昨年度を上回る閲覧回数となっており、定期的閲覧する人が増えていると推測される。 次年度は、閲覧回数のさらなる増加を目指し、行事のない時期は日常の学校生活の1コマを紹介したり、中学生向けに「疑問にお答えコーナー」などの連載企画を設け、継続して閲覧したくなるような工夫をしたい。
5	【業務改善】 スクラップ&ビルドの観点で業務を見直し、さらなる効率化を図る。業務分担の標準化を進め、月平均超過勤務時間を2.5時間以内に抑える。	① 校務分掌ごとの業務内容を点検し、改善に努めるとともに、生成AIの活用など業務の効率化を推進し、職員の超過勤務時間の削減を図る。	超過勤務時間の月別平均が A 2.5時間未満 B 2.5時間以上4.0時間未満 C 4.0時間以上5.5時間未満 D 5.5時間以上	勤務時間の月別調査の本校職員の平均値を調査 29.2時間 最終評価 B	4月から12月までの超過勤務時間の平均は29.2時間となり、3.0時間を下回った。通常期における超過勤務時間は大きな変化は見られず、概ね一定で推移している。一方、8月や12月などの休業期間中は超過勤務時間が大きく減少しており、働く時と休む時のメリハリが出てきたように感じる。 今後は、添書等を適宜メールで簡略化することや、パソコンの「共有」機能を活用して同時に作業を進めるなど、不易流行の観点でより効率的な業務体制への移行を図りたい。
学校関係者評価委員会の評価		〇いじめはなかなかなくなるもの、今後も先生方には目を光らせて欲しい。 〇中学校へは、どのように情報発信を行っているか。			
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		〇生徒指導は生徒の悪い行いに対して指導することはもちろんであるが、この1年は生徒を褒めることを心掛けた。また、「規範意識週間」などの生徒主体の活動を充実させることで、生徒自らが考え行動できる力を育て、いじめを生まない学校づくりを進めていきたいと考えている。 〇中学生向けのお便り「羽工だより」を年4回発行している。紙面にはQRコードを掲載し、ホームページにもアクセスしやすい工夫を行い、より多くの方に本校の情報を見てもらえるようにしている。			